

論」を公刊されるまでのゆくて(伊藤漱平著作集) I「自跋——處女論文から著作集まで——(参照)などは露ほども知らぬま、一九五五年四月、島根大學へ赴任する二十九歳の「漱平さん」を札幌驛にてお見送りしたのである。

* そのあくる年の三月に卒業した私は、四月、「漱平さん」の後任という重責の自覚もないうままに助手になった。先輩たちはとうに就職してしまい、一年間空いたままだった助手の席をとりあえず填める必要があったのこらしかった。

ところで、遠くに去った「漱平さん」は、一九五八年から六〇年にかけての『紅樓夢』新譯の刊行(平凡社、中國古典文學全集24・25・26)という、いま思ってもとんでもない偉業をなしてげられた。島根に去ってわずか五年! この偉業のためにナミ子夫人もいかに苦勞なされたかは、のちに夫人からうかがったところであるが、ともあれ、はるかかの「漱平さん」は、もはや「漱平さん」ではなく、漱平先生であると襟を正し、こちらはまだひよっこながら稚い作物をお送りするなどして、新しい段階での交誼がはじまったのである。

私はといえば、助手を九年つとめたあげく、「漱平さん」が島根に去ったのとはほ同様の理由をもって北大を辭し、一九六五年四月、キャンベラなるオーストラリア國立大學に赴任した。六八年一月に歸國してから三年間の浪人生活において、身のふりかたをめぐり、漱平先生にどれだけご心配をかけたことか——。

やがて、まことにふしぎな縁がめぐりめぐって、漱平先生は一九七〇年四月、北大に教授として着任され、あくる七一年四月、私

もまた、退休される恩師飯塚朗先生の後任として北大にもどった。

伊藤教授のもとでの大島正二氏ともどもの助教ぐらしは、幸福の一語に盡きた。教室の運営をめぐる萬機は、伊藤教授が定期的主宰する教室會議に諮られたが、實務のすべては伊藤教授と、一昨年他界された丸尾常喜助手(當時)に委ねばなした。書類をひるげ電算機で圖書費の計算に汗だくのおふたりを見かけることがよくあった。

そんな幸福が、一九七六年の秋、突如としてこわされた。伊藤教授があくる七七年四月、東大に轉出すると告げられたのである。それからの私は、荒れた。教授に桶突き、あげくは酔った勢いで自宅に電話し、「なんで東大なんかに行くんですか」と、悪態をついたりもした。でも結局は、七七年四月、またもや札幌驛にてお見送りののである。

東大に去られてはどなく、伊藤教授から赤門前の老舗の銘菓が送られてきた。どうやら「仲なおし」しようということらしい。私もゴキゲンをなおし、澁谷のハチ公で伊藤教授とデートし、鯨料理をごちそうになったりもした。櫻料理のこともあった。(先生、いささかゲテもの好きだった。)

* そのころになって、北大助手時代の「漱平さん」のことをあらためて思いだすようになった。コピー機などない時代のこととて、飯塚先生の演習や講讀の教材は、ガリ版刷りのものが多かった。あきらかに「漱平さん」の手になるものである。「和習」を嫌った「漱平さん」の筆蹟には獨特のものがあつた。そのときはなんとも思わなかったが、自分が助手になってからのこと——

やはり飯塚先生の演習のための教材のガリ版刷を用意し、B4判数枚まとめておとどけた。あとで先生がいわれるには、「一字まちがっていたよ」。あわててあやまると、先生はつけ加えた。「漱平君は、一字もまちがえたことがなかった」。

これには、私もこたえた。たかがガリ版切り、ではなかった。コピーだ、ワープロだ、電子メールだ、の當節の若ものには想像もできないことかもしれない。鍵盤にのせた原紙を鐵筆でガリガリと削りながら書いていくのである。一字くらいまちがったってしかたないだろ、と正直のところ肚のなかで思った。

しかし、そうではない。あのころの「漱平さん」が黙々とガリ版を切り、一字たりともゆるがせにしなかつた姿勢は、その後の膨大な論著のすべてに餘すところなく見られる精緻な論證に、一直線につながっていたのだ。

かつて伊藤漱平先生の旅立ちを二度お見送りした私にとって、いまや幽明その界を距てた實感はほとんどない。やがて彼の岸にたどり着いたとき、時間の齒車を逆にまわし、「漱平さん」と呼びかけみたい気がするが、さて、どうだろうか?

(北海道大學名譽教授)

伊藤漱平先生を偲んで

大木 康

元東方學會常務理事・東京支部長、伊藤漱平先生は、二〇〇九年十二月二十一日、慢性腎不全のため仙逝された。享年満八十四歳。伊藤先生は、中國文學のなかでも近世小説、とりわけ清代の長編小説『紅樓夢』百二十回の研究によって、いわゆる「紅學家」として最も廣く知られる。

筆者は、一九七八年秋、はじめて伊藤先生の講筵の末席を汚して以来(翌七九年四月に中國文學科進學)、先生からお教えを受けてきた。恩師逝去の悲しみの涙をぬぐいつつ、ここに先生のご業績と思ひ出のいくつかを記してみたい。

伊藤漱平先生は、大正十四年(一九二五)に現在の愛知縣碧南市にお生まれになった。お名前は、夏目漱石と森田草平から取られたのではというのが先生ご自身による解説である(「名前負けの話 漱石の孫弟子これに在り」伊藤漱平『見戯生涯 一讀書人の七十年』汲古書院 一九九四所収)。このお名前をつけられたご尊父は、事業を営まれるかたわら、ご自身書を嗜む文人であられたようである。

舊制刈谷中學の時代から、サッカー部(ア式蹴球部)に所屬され、キャプテンとしても活躍されたとき。刈谷市は現在でもサッカーの町として知られ、サッカーの盛んな土地であるが、昭和十年

(一九三五)八月、舊制刈谷中學校は、甲子園で開催された第十七回全國中等學校蹴球選手権大會に初出場で第三位入賞を果たしている。その名門サッカー部のキャプテンであり、「三年の夏はじめて甲子園へ、秋にまた明治神宮大會に出場できた上に、五年のとき再び甲子園・神宮の地を踏めた」(「甲子園でのわが痛恨事」)「見戲生涯」所収)とある。後の第一高等學校時代にもア式蹴球部に所属され、『向陵誌 駒場篇』(一高同窓會 一九八四)「ア式蹴球部」の項には、H B (ハーフバック、いまでいうミッドフィールダー)として、お名前が残る。同じ記事により、東大中國文學科の前身直彬教授も、伊藤先生の令兄泰方氏と同じ時期に、一高ア式蹴球部に所属しておられたことを知った。

八十四歳のご高齢に至るまでためまぬ研鑽を続けられ、しかも『紅樓夢』のように、通讀するだけでも容易でない長編小説を巨細に研究され、幾度にもわたって翻譯を重ねられたことは、サッカーによって培われたその強健な體力が根底にあったことはまちがいないと思う。

昭和十八年(一九四三)四月に第一高等學校文科にご入学。時は折しも戦時であったが、上京と同時に、ご尊父よりの依頼状をたずさえて松井如流師の門に入って書を學ばれた。先生の書齋である「兩紅軒」の扁額は、如流師の揮毫になるものである。

昭和二十年四月、東京帝國大學文學部支那哲文學科に入学されるや、四月五日には休學、入營。終戦により翌二十一年四月、復員に伴い復學された。當時語學文學の講座を擔當されたのは、倉石武四郎教授である。倉石教授は清朝經學の専門家であるが、その學問の範圍は廣く、戯曲小説をはじめとする俗文學にまで及んでいた。北

京留學中には、吉川幸次郎教授とともに旗人奕侍園について、『紅樓夢』を通讀され、伊藤先生の在學された昭和二十二年度の『文學部學生便覽』を見ると、この年の倉石教授の演習は『儒林外史』である。先生が復學された年の倉石教授の演習のテキストは魯迅の『阿Q正傳』。伊藤先生ご自身、卒業論文の題材に魯迅を取り上げようとしたが、圖書館にあった『魯迅全集』が、東洋文化研究所の仁井田陞教授に貸し出されており、『紅樓夢』を取り上げることになったと記しておられる。(M先生を媒介者としたL先生との因縁)『見戲生涯』所収)。魯迅については、後年中島利郎教授とともに『魯迅増田涉師弟答問集』(汲古書院 一九八六)を編纂発行され、また増田涉教授による翻譯(改譯)が上巻まで止まっていた岩波文庫新版の魯迅『中國小説史(略)』下巻の翻譯を擔當されるご豫定であったというのも、一つの因縁であろう。

「倉石先生の嘗めるように丹念な演習では、『阿Q』をほぼ一年

がかりで讀み上げた」(同前)と記されるように、倉石教授からは一字一句をゆるがせにしない讀書の方法を學ばれた。それが、ご研究また翻譯に活かされ、さらにその讀書の法をわれわれ學生にも傳えられたのであった。

倉石教授の嚴密な學問に加えて、昭和二十二年(一九四七)に助教として着任された松枝茂夫教授、また昭和二十一年に非常勤講師として出講された増田涉教授の指導を受けられたことも忘れるわけにはいかない。松枝教授には岩波文庫版の『紅樓夢』翻譯があり、増田教授にはすでに觸れた『中國小説史略』をはじめとする魯迅作品の翻譯がある。伊藤先生は、倉石教授からより多く學者としての姿勢を學ばれるとともに、松枝、増田兩教授からより多く文學

者としての姿勢を學ばれたといえよう。また、先生が書誌學の泰斗である長澤規矩也教授の指導を受けられたことも、特筆すべきことである(昭和二十二年度『文學部學生便覽』に長澤講師「書誌學概説」)。これが『紅樓夢』や李漁の版本研究につながった。長澤教授は書誌學全般に通じておられたが、現在東京大學東洋文化研究所に藏される雙紅堂文庫によって示されるように、戯曲小説にも強い關心を抱いておられた(昭和二十四年度『文學部學生便覽』に長澤講師「演劇歌謠資料」)。

伊藤先生の師承を考える場合、倉石教授、松枝教授、増田教授、そして長澤教授から引き継いだ學問が重要だと考えられる。それぞれの先生方が、當時の中國において本格的な研究が勃興しつつあった俗文學と何らかの関わりをもっておられたことが、伊藤先生が『紅樓夢』に出會われる下地になったと思われる。さらにいえば、東京帝國大學には、大正から昭和のはじめにかけての一時期、俗文學方面の研究を世界的にリードした鹽谷溫教授もおられたわけであるから、先生は東京の學問的傳統をまっすぐ繼承されたといえるであろう。

伊藤先生といえは、まず思い浮かぶのは、そのご藏書である。筆者がはじめて伊藤先生にお目にかかったのは、一九七八年の秋、いわゆる持ち出し講義として東大駒場の二年生を対象に開講された「中國文學史概説」の講義に出席した時である。ご講義の内容は、中國文學史についての著述を検討するという授業で、現在盛んにいわれている「文學史の書き直し」の方向を、いち早く先取りされたものであった。先生は、毎回の授業にあたって、両手に大きな鞆を持ってこられ、中につまんだ世界中で書かれた中國文學史の書物を

一つ一つ手にとりながら、その作者と特徴とについて論じ、その實物を學生に回覽してくださった。すべて、先生ご自身が集められた本であった。研究に必要な書物は、その関連のものも含めて、自分で買って持っていないならばならないことを、ごく自然な形でお教えたのであった。

やがて文學部に進學し、法文二號館の三階にあった先生の研究室で行われた授業に参加するようになったが、まず衝撃を受けたのが、研究室に足の踏み場もないほど積み上げられたご藏書であった。演習でテキストを讀みながら、何か問題にぶつかると、先生は、山のような書物の中から、関係の書物を取り出され、われわれに示される。研究室に置かれていたのは、戯曲小説関係の本と工具書目録類であったから、ご自宅にはもっとたくさん本があったよううで、翌週の授業の際、ご自宅から本を持ってこられて示されることもあった。

先生の資料集めは徹底しておられた。北大におつとめだった時代、札幌は東京ほど多くの書店があるわけではなかったが、「四方八方にアンテナを張りめぐらして、東京の人に負けないように資料を集めました」と語られたのを記憶している。

先生は、本を手に入られると、線装本の場合、ご自分で帙を作り、題簽を書いておられた。雑誌論文などのコピーについても、白の厚紙で表紙を作られ、やはり達筆の題簽をつけておられた。東京大學総合圖書館に藏される鷗外文庫の本の多くに、森鷗外自身による表紙題簽が付されていることが、思い合わされる。とにかく書物を愛しておられたのである。

ご藏書についての話をしまえば、先生のご藏書のうち、工具

書目録など参考圖書の大部分は、現在二松學舎大學の中國文學研究室に蔵され、日々學生たちの利用に供されている。そしてご蔵書のうち、『紅樓夢』と李漁、『嬌紅記』に關するものは、東京大學東洋文化研究所に「兩紅軒文庫」としてお譲りいただいている。名前の由来にもなっている『紅樓夢』程甲本は、日本に一つしかない本（吉川幸次郎教授舊蔵）、元の宋遠作の文言小説『新鏡校正評釋申王奇遜擁爐嬌紅記』は世界に一つしかないもの（林秀一教授舊蔵）である。

東洋文化研究所に、その師である倉石教授の倉石文庫、長澤教授の雙紅堂文庫、そして先輩であり前任の研究室主任である前野直彬教授の夕嵐草堂文庫と並んで兩紅軒文庫を受け入れることができたことは、一つの因縁であり、光榮なことと思うとともに、これらの本を未來永劫まで傳えていく責任の重さを感じている。

なお、倉石文庫には、やはり日本に一点だけの『紅樓夢』程乙本があり、これで研究所に『紅樓夢』最初期の印本（木活字本）である程甲本、程乙本の兩本がそろったことになった。また、雙紅堂文庫は、そもそも長澤教授が、戯曲『金童玉女嬌紅記』『新錦節義鶯塚嬌紅記』の兩善本をお持ちだったことから命名されたのであるが、現在研究所の雙紅堂文庫には、この兩本はない（京都大學文學部に蔵される）。そこに、小説ではあるが、稀覯の『嬌紅記』がやって来たことも、また因果の縁に導かれてのことであろう。

本の話が長くなってしまった。先生のご経歴に戻る。先生は、昭和二十四年（一九四九）に東京大學文學部をご卒業。卒業論文の題目は、『紅樓夢』覺書』であった。先生の論文の題名には、『覺書』の二字が付されるものが多いが、それは卒業論文からはじまっている。

で、先生の『紅樓夢』研究における代表的論文の一つである「脂硯齋と脂硯齋評本に關する覺書」が發表される。先生の論文の特徴は、きわめて息の長いことで、例えばこの論文は（一）から（五）まで、五回に分けて發表されている。後年の「程偉元刊『新鵝全部繡像紅樓夢』小考」も、最初の論文の後に、補説、餘説と續き、李漁の小説の版本に關する論文も、補、再補など、都合六篇に至る。ねばり強い探求のしからしむるところである。

これらはいずれも版本を中心とする研究である。先生の版本研究は、その調査考證の精密さはもちろんのこと、版本の系統圖を作って能事終われりとするのではなく、『紅樓夢』についても、李漁の小説についても、それぞれの版本を生み出した人々の姿が浮き彫りにされる點に特徴がある。一つ一つの書物、一つ一つの版本には、それを生み出し、それを傳えた人々の物語がある。考證のなかの文學。この點が、伊藤先生の論文の魅力であろう。

一九七〇年、先生は大阪市立大學から、古巣である北海道大學に移り、中國文學研究室の教授となられ、ついで一九七七年、東京大學文學部に移られる。そこで筆者がはじめて先生と出會い、以來お教えを受けてきたことは、すでに述べた通りである。當時の中國文學科は進學する學生の数が必ずしも多くはなく、受講者が筆者一人といったことがたびたびあった。毎週一人で譯讀を擔當するのはしんどくもあつたが、いまにして思えば何とも贅澤な話である。

伊藤先生は一九八六年三月に東京大學をご退休。その後二松學舎大學に移られ、一九八九年から一九九三年まで、同大學の學長もつとめられた。またこの間、一九八七年から八九年、一九九三年から九五年の二期にわたって日本中國學會理事長、一九九二年から一九

たのであつた。大学院に進學されてまもなく、北海道大學法文學部に助手としてご就職。北海道大學では、最初の公刊論文である「曹霑と高鶚に關する試論」（『北海道大學外國語外國文學研究』第二輯一九五四）を發表される。一九五五年には島根大學に講師として移られ、ついで助教に昇任される。島根大學では、「李漁と曹霑」その作品に表はれたる一面（上）（下）（『島根大學論集』六、七號一九五六、五七）を發表される。生涯の研究テーマであつた李漁と『紅樓夢』が、ここに出そろうている。

この島根の時代、一九五八年から、最初の『紅樓夢』翻譯である平凡社中國古典文學全集版の『紅樓夢』上中下三巻が刊行される。以後、先生は、一九六一年には同社奇書シリーズ（三巻）として、また六九年には中國古典文學大系（三巻）として、さらにはご退休後の九七年には平凡社ライブラリー（十二巻）として、再三にわたりの長編小説の翻譯を刊行され、そのたびに手を加えられている。これらの翻譯を通して『紅樓夢』の世界に入つていった讀者は、敷え切れない敷にのぼるであろう。渡邊和博とタラコプロダクション『金魂卷』（主婦の友社 一九八四）のマル金（金持ち）辯護士の讀書の項には、「伊藤漱平譯の『紅樓夢』を讀破しようとなんばっている」とある。

東洋文化研究所の兩紅軒文庫には、先生が手元に置いておられたご自身の『紅樓夢』翻譯各本が収められている。これを見ると、どの巻にも多くの書き込みが施され、例えば中國古典文學大系版に見える書き込みは、ライブラリー版ではきちんとそのように直されているといった、生涯のご苦勞の後を追うことができる。

一九六〇年には島根から大阪市立大學の助教に移られる。ここ

九五年にかけては、東方學會常務理事・東京支部長をつとめられ、學會の發展に寄與しておられる。

一九九八年には二松學舎大學からも退き、同大學名譽教授となられたが、この後、まずは平凡社ライブラリー版の『紅樓夢』翻譯を手がけられ、これを完成された。そして、これまでに書かれた論文をまとめた五巻からなる著作集の編纂に着手され、二〇〇八年秋にはそのうちの三巻「紅樓夢編」上中下が完結し、續く第四巻「近世文學編」は校正の最終段階に至つていた。

昨年十二月、入院中だった先生のご容態が悪化された際、「キューウ……」とつぶやかれたとお知らせを令嬢しをり様からいただいた。それはきつと著作集を刊行している汲古書院のことであろうと、編集實務を擔當しておられた汲古書院の小林詔子さん、そして編纂に深く関わっておられた、先生の二松學舎の愛弟子である縣立廣島大學の丸山浩明さん、そして筆者の三人で、十二月十八日、病院へお見舞にうかがつた。思ったよりもお元氣で、話しかけると、一つ一つ大きくうなずかれた。だいたい弱られた様子ではあつたが、まさかその三日後の二十一日に息をひきとられるとは思わなかつた。著作集の完成を目前にしてのご逝去はさぞやご無念であつたらう。その著作集第四巻は三月に刊行され、最終第五巻も本年中に刊行の豫定である。

（東京大學東洋文化研究所教授）